

ヒューム『人性論』分析： 経験論における「経験」の位置づけについて

2020年8月11日 宮国淳

<http://miya.aki.gs/mblog/>

※ 引用される場合は、出典を明記して
くださるようお願いいたします。

本稿は、ヒューム著、土岐邦夫・小西嘉四郎訳『人性論』（中央公論社）第一篇の分析、主に「経験」というものの位置づけを取り扱うものである。

『人性論』第一篇において「経験論」という用語が用いられているわけではない。そしてヒューム自身「経験」という言葉をそれほど厳密に定義しようとしているわけでもないように思える。しかし、その無自覚が分析のブレを生んでしまっているようにも思えるのだ。

経験論と合理論の論争において、「知識は経験によってのみもたらされるのか」という問いは重要な位置を占めていると思う。「生得観念がなにかあるのか」（ヒューム、16 ページ）、そういった問いも考慮した上で（そしてそれを否定するためもある）ヒュームは理論を構築している。

しかし、実のところこれは的外れな議論なのではないか。そもそも「知識」とは何なのか？ 知識そのものが「経験」として現れているものなのではないのか？

経験として実際に、具体的に現れているものはすべて経験である。当たり前の話だ。数学の答えを探し、ついに答えにたどり着く過程、現在の状況を把握した上でこれから何が起こるのか推測する過程、そこに飛んでいる鳥を見て「あれは鴨かな？」と思う過程、それらすべてが「経験」なのである。

経験から知識がもたらされる、というのではなく、知識そのものが経験なのである。 知識そのものが経験として現れている。

一方、そこに「原理」というものは具体的知覚として現れてはいない。「原理」というものは因果関係に基づくもの、ある現象・ある認識をもたらす仕組みというものを因果的に示そうとするものである。しかも一元的説明に陥ることしばしば誤謬を生む。しかし、具体的経験として現れるのは知覚と知覚の継起（あるいはその繰り返し）でしかなく、「因果関係そのもの」の観念やら印象を探してもそこに見つかることはないのである。

ところがヒュームの分析手法において、「経験⇒原理⇒特定の観念」という枠組みが常に付きまとっている。しかし、「原理」云々以前に、知識あるいは観念は私たちの経験として現れてしまっているのである（そして現れていないものは現れていないのである）。

因果推論した事実、「空が曇ってきたからもうすぐ雨が降るだろう」と思った事実、

これも経験であることに変わりはない。しかし「なぜ因果推論できたのか」という「原因」あるいは「原理」を探したところで、様々な説明が可能ではあるが、一元的因果的説明など出来ようもないのである（このあたりはレポート〔1〕や〔5〕でも論じている）。

ヒュームは「原理」思考から脱することができなかった、そこがヒューム経験論の限界であったと思うのである。

本稿における引用部分は『人性論』からのものである。また、私は『人性論』を分析しながら、下記のレポートを作成した。本稿で参照する場合は各番号で示すことにする。

- 〔1〕ヒューム『人性論』分析：「関係」について
http://miya.aki.gs/miya/miya_report21.pdf
（抽象観念および言葉の意味、時間・空間、複雑観念、因果関係）
- 〔2〕ヒューム『人性論』分析：記憶と想像の違いとは？
http://miya.aki.gs/miya/miya_report27.pdf
- 〔3〕ヒューム『人性論』分析：「信念」について
http://miya.aki.gs/miya/miya_report28.pdf
- 〔4〕ヒューム『人性論』分析：「同一性」について
http://miya.aki.gs/miya/miya_report29.pdf
- 〔5〕ヒューム『人性論』分析：「存在」について
http://miya.aki.gs/miya/miya_report30.pdf

目次 ※ ()内はページ

- I. 「経験」とは何か (3)
 - 1. 『人性論』における経験の位置づけ
 - 2. 「経験」は「心」に現れるものではない
 - 3. 「きずな」「引力」があるから観念が結び合わされるのではなく。観念が結び合わさっている状況が具体的経験として現れている
- II. ヒュームは因果関係における「経験」の位置づけを見誤っている (6)
- III. ヒュームは推論の「正しさ」がいかにして確かめられるかということと、なぜ推論できるのか（因果推論できた「原因」）とを取り違えている (8)
 - 1. 因果推論を因果推論によって根拠づけようとしている
 - 2. 因果推論の「正しさ」の検証
 - 3. 経験論として因果関係・因果推論を説明するとは
- IV. 経験がいかにか知識をもたらすかではなく、知識がいかにか経験として現れているか、そこが問題 (12)

I. 「経験」とは何か

1. 『人性論』における経験の位置づけ

ヒュームは、哲学（ヒュームの言う「人間の学」）の基礎は、「経験と観察」にあるとしている。

人間の学がほかの学問にとっての唯一のしっかりした基礎であると同様に、この人間の学自体に対して与えうる唯一のしっかりした基礎は、経験と観察におかれなければならない。（ヒューム、9 ページ）

・・・ここにおける「経験」とはいったい何なのであろうか？ ヒュームは知覚（印象・観念）以外のものは現れることはないとしている。（私がレポート〔1〕で指摘したように、言葉の位置づけの問題はあるのだが）実際そうなのである。では、「印象」「観念」と「経験」との関係はいかなるものなのであろうか？

① 経験＝印象（そして経験⇒特定の観念、という分析）

② 経験＝すべての知覚経験

・・・『人性論』においては「経験」という言葉が①のニュアンスで用いられているように思える。しかし、すべての知覚が経験であり、①の見方は経験というものを恣意的に狭めているのではなからうか。後述するが、ヒュームはさらに「経験⇒原理⇒特定の観念」という因果分析をしてしまっているのである。

しかしヒュームは因果関係をアプリアリに前提する態度はとっていない。にもかかわらず、（後述するが）因果関係をもたらず原理・理由というものを因果的に導こうとする誤謬に陥ってしまっているのである。ヒューム理論におけるこのブレが、ヒューム自身の説明を混乱させてしまっている。

原因と結果は、明らかに経験によって知らされる関係であって、抽象的な推論や考察から知らされる関係ではない。この関係について、どんな単純な現象であっても、われわれに対して現れるままの事象の性質から説明できるような、言いかえると、記憶や経験の助けをかりずに予知できるような、そういう現象は一つとしてないのである。（ヒューム、39 ページ）

・・・ヒュームは、因果関係への信念は究極的に誰かが受け取った「印象」へ辿れることで確かめられると説明している（ヒューム、49～50 ページ：シーザーの事例）。「記

憶や経験」というのは「記憶や印象」とほぼ同義であると考えられる。

新しい生成にはすべて原因が必要だという考えは知識から引き出されるのではなく、またいかなる学問的推論からも引き出されないのだから、どうしても観察と経験とから生じるものでなければならない。そこで、当然、次に問題になるのは、いかにして経験はそのような原理を生じさせるのか、ということである。(ヒューム、47～48 ページ)

・・・ここで、経験⇒原理、という思考となってしまうている。経験がいかにして因果関係という思考フォーマットをもたらすのか、因果関係という思考フォーマットをもたらす「原理」「原因」をヒュームは問うてしまったのである。

2. 「経験」は「心」に現れるものではない

ヒュームは以下のように述べている。

自己のいかなる観念もわれわれは持っていない (ヒューム、108 ページ)

個々の知覚とは別個な心なるものについてはわれわれはなにも知らない (ヒューム、135 ページ)

・・・知覚経験の前提として「自己」というものが前提されているわけではない。また知覚経験の前提として自己と対象物の分離が前提されているわけでもない。ヒュームは知覚からいかにして自己や自己とは別個に存在する対象物というものを説明できるのか試みていたはずである (それが上手くいかなかったとしても)。

そういう意味では、「人間の学」という表現は正確とはいえないのではなかろうか。存在としての人間があって知覚があるのではない。まずは知覚が現れている、人間という生物の存在についてはそこから因果的に導かれる事柄であるといえよう。

知覚は「心」に現れるのではない。まずは現れてくる知覚があり、心の問題はそこから検証されるものである。「人間性に本来備わっている性質」(ヒューム、21 ページ) についても同様である。ヒュームは、

経験⇒「人間性に本来備わっている性質」⇒特定の観念

・・・というふうに、経験⇒観念の形成に何らかの“媒介物”を想定してしまっているの

である。

3. 「きずな」「引力」があるから観念が結び合わされるのではなく、観念が結び合わさっている状況が具体的経験として現れている

ヒュームは複雑観念において「*観念の間を結び合わせるこの原理*」(ヒューム、20 ページ)を探そうとしてしまっている。レポート〔1〕で既に詳細に説明しているのだが(主に5~14 ページ)、原理を問う以前に、経験として観念どうしが(あるいは印象どうしが)結び合わさっているのである。

「リンゴ」というものは色や味や香りという観念が”結合”して出来たものではない。そこに見えているもの、今思い浮かべている観念(心像)が、「リンゴ」であり「色」を持っているのである。あるいはその観念と同時に「香り」や「味」を連想したりするのである。

「近接」という「関係」とはまさに対象がそこに並んで見えている、リンゴとバナナを隣どうしに置くことはできるしそういう状況を想像することもできる。複数の本を積んで置くこともできるし本棚に立てて並べることもできる(もちろん想像上でも)、そういうことなのであって、リンゴとバナナという「観念」が「引力」やら「きずな」やら「習慣」やらによって結び合わさるわけではないのだ。

「関係」が経験を離れた「原理」「原因」(引力、きずな、習慣など)によってもたらされているのではなく、経験として関係がいかに現れているのか、そこを見極める必要があるのだ。「きずな」「引力」があるから観念が結び合わされるのではなく、観念が結び合わさっている状況が既に具体的経験として現れている。問題は、それら観念結合が具体的経験としていかに現れているのか、それを正確に説明できているか、ということなのである。

ヒュームはさらに「引力」の“原因”を問うてしまう。そして「*人間性に本来備わっている性質*」(ヒューム、21 ページ)という結論を、何の検証もなく導いてしまっている。

II. ヒュームは因果関係における「経験」の位置づけを見誤っている

一つの対象の存在から他の対象の存在を推理できるのは、ただ「経験」によってだけである。(ヒューム、53 ページ)

・・・しかし、私たちは経験に反した推論をすることもできるのである。なんだか今日は違うことが起きるかも？ という根拠もわからない推論も当然ありうるのだ。それが正しいかどうかは、実際に今日という日を過ごしてみなければ分からない。

経験が因果関係というものを導いたのかどうか、そんなことは分からないのである。知らないうちに私たちは因果関係で物事を考えてしまっている。ヒュームは因果関係の「原因」を探してしまったのである、

そうではなく、因果関係を認めた事実、具体的に言えば「雲がたちこめてきたからそろそろ雨が降るかな？」と思ってしまった事実が、具体的経験として現れている、ということなのである。因果推論した事実が経験として現れているのであって、経験によって因果関係が導き出されたのではない。そこは取り違えてはならない。

もちろん、過去の経験の繰り返しから、事象 A が起これば次に事象 B が起こるのである、と考える、そういった経験則的思考が日常的に行われていることを否定するものではない。そうではなく、因果関係という思考フォーマットが具体的事実として現れている、その「原因」を問うたとしても、やはりそれは経験と経験との事後的な関連づけとして追及していく他はない。

問うことはできる。しかし、レポート〔1〕や〔5〕などで説明したように、様々な答えが可能であり、一元的・原理的にその原因を確定できるようなものではないのだ。

因果推論が経験として現れている事実がそこにあるだけで、それは因果関係がアプリアリであるということではないのである。ある時、ある事象に関して因果推論したからといって、別のときに同じように因果推論するかどうか分からないのだ。

この経験の本性というのは次のようなものである。まず、ある一つの種類の対象が存在した実例に、かつてしばしば出会ったことを思い出す。また、対象の他の種類に属する個物がいつもそれらに伴い、しかも、それらに対して近接と継起の一定のあり方を保って存在していたことを思い出す。・・・(中略)・・・それにまた、過去のすべての実例で両者の間に恒常的な相伴があったのを思い起こす。そのとき、もはやこれ以上こだわらずに、われわれは炎を原因、熱さを結果と呼び、一方の存在から他方の存在を推理するのである。(ヒューム、53～54 ページ)

・・・ここでは「記憶」も「経験」に含まれてしまっている。ヒューム自身、「経験」という言葉をそれほど厳密に定義した上で用いているわけではないことがうかがえる。

そして、ここにもヒュームの「経験」に関する誤解が入り込んでいる。推理したこと

が「経験」であって、それはそのまま経験として受け取らなければならない。しかしヒュームはその「経験」の「原因」を問うてしまっている。

そもそも推論が「常に正しい」必要がどこにあるだろうか？ 私たちは恒常性があるうとなかろうと推論し、その推論が正しかったり間違ったりする中で、自らの経験則を更新していくのである。推論が本当に「正しい」のか「客観性」を持つものなのか、それを確かめるとき、はじめて「恒常性」(＝再現性)が求められているのである。

推論をしたとき、他の人に「本当に正しいのか？」と聞かれれば、過去にそうだったろうとか、今からそうなるから見ておけ、とか・・・あるいはある学者が「過去」に書いた本を見せて「ほら、こうなるという事例が既に示されている」とか、具体的事例として、実際に起きていることを示すのである(本は過去に書かれているけれども、読んだ人にとっては新たな経験であるともいえる)。

「これから雨が降るだろう」という推論は、実際に雨が降って初めてその「正しさ」が認められるのであって、いくら過去の事例を集め根拠づけしたところで、実際に雨が降らなかつたら「間違い」であることは変わらないのだ。

経験が観念を生み出すのは知性によるのか、想像によるのか、すなわち、移行をなすよう規定するのは理性なのか、それとの知覚のある連合、つまり自然的関係なのか、ということである。(ヒューム、54 ページ)

・・・ここにおいても「経験⇒原理(知性、想像、理性、自然的関係)⇒観念」という分析的枠組みになっている。しかし、繰り返すが**“観念が生み出された”こと(つまり心像が現れたこと)が「経験」なのである。ヒュームは「経験」というものの位置づけを見誤っている。ここでもヒュームは因果推論の「原因」「原理」を問うてしまっている**のである。

かりに蓋然的な推論に少しも印象が混じっていなければ、その結論はまったく架空のものとなる(ヒューム、55 ページ)

・・・これも**「推論した事実」と「推論が正しいと確認されること」とを混同している**ともいえる。推論の「正しさ」は印象、つまり具体的感覚経験により確認されることで「正しい」と認められるのである。推論が**“架空”**なのは当然である。(もちろん、因果推論の「正しさ」を追求するために印象としての経験が必要だ、という見解ならば、もつともであるが)

ヒューム自身が述べているように、「推論」とは未だ経験として現れていない事象について、予想することである。まだ「正しい」と確かめられていないことなのである。

Ⅲ. ヒュームは推論の「正しさ」がいかんにして確かめられるかということと、なぜ推論できるのか（因果推論できた「原因」）とを取り違えている

前章における分析を、さらに深めてみよう。

1. 因果推論を因果推論によって根拠づけようとしている

一つの対象の存在から他の対象の存在を推理できるのは、ただ「経験」によってだけである。この経験の本性というのは次のようなものである。まず、ある一つの種類の対象が存在した事例に、かつてしばしば出会ったことを思い出す。また、対象の他の種類に属する個物がいつもそれらに伴い、しかも、それらに対して近接と継起の一定のあり方を保って存在したことを思い出す。こうして、たとえば炎と呼ばれる種類の対象を見たこと、また熱さと呼ばれる種類の感覚を感じたことを思い出す。それにまた、過去のすべての事例で両者の間に恒常的な相伴があったのを思い起こす。（ヒューム、53～54 ページ）

・・・具体的に検証してみよう。因果推論に関しては、二つのケースがありうる。

- ① 答えが浮かんでいる場合（観念あるいは印象として現れている場合）
- ② 答えが浮かんでいない場合

・・・まず①についてであるが、熱いと感じるとき、そこに炎があれば、炎のために熱いと感じている、と容易に因果推論できるであろう。一方、②については新たな経済政策を実行しようとしているがその結果が容易に判断できない場合、などである。そういう場合、似たような要素を持つ様々な事例のデータを集めた上で、因果推論するであろう。

これらの因果推論について、経験論としてはどのように受け止めれば良いのであろうか？ ①の場合、炎と熱との因果関係を認めるのに、いちいち過去の経験の恒常性など思い浮かべるであろうか？ マッチで火をつけたとき、炎が柄の方にだんだん進んできて思わず「熱い」とマッチを放り投げてしまったとする。炎と熱さとの間の因果関連を認めるのに、いちいち過去の事実を思い起こすであろうか？

具体的に検証してみてほしい。「過去のすべての事例で両者の間に恒常的な相伴があったのを思い起こす」とはいったいどういうことなのであろうか？ いちいち、炎を熱いと思った具体的な事例を一つ一つ思い出すのであろうか？ そんな具体的記憶いちいち思い起こせるのであろうか？

具体的経験としては、「恒常性」などおかまいなしに、とにかくにも「因果推論」したのである。あるいは「因果関係を認めた」のである。このとき”過去のすべての実例”というものが経験として現れているわけではない。

つまり、炎を熱いと思った経験と、その時点において経験として現れてはいない”過去のすべての事例”との間の因果関係がいかにか成り立つのか、という問題が生じてしまうのである。

記憶もしくは感覚機能に現れる印象から原因あるいは結果と呼ばれる対象の観念への移行が過去の経験、すなわち両者の恒常的な相伴の想起をもとにすることが明らかになった（ヒューム、54 ページ）

原因と結果の観念は、しかじかの特定の対象が過去のすべての実例で、きまってる互いに伴っていたことを知らせる経験に起因する。（ヒューム、56 ページ）

・・・とヒュームは結論づけているが、これでは「過去の経験の恒常的相伴⇒因果推論」、という「原因」「結果」の関係になっている。つまりこの関係もやはり「蓋然性 probability」でしかないのだ。

炎と熱さとの関係は、私たちにとってはあまりに当然な経験則であるから、「過去の経験の恒常的相伴」が因果推論をもたらしたという結論は、一見もつともらしく感じられるのであるが、マッチの火を「熱い」と思ったとき、過去の事例をいちいち思い浮かべてはいないという事実、その具体的事実をまず「額面通り」に受け取る必要がある。その上で過去の経験（の記憶）との関連づけについて分析していく、これが経験論としての分析の順序ではなかろうか。

「恒常性」が因果推論を引き起こされた「原因」ではないと言っているわけではない。しかしそれはあくまで「蓋然性」レベルの因果推論なのである。

特に言うまでもないが、かつてすでに得られた結論あるいは原則をもとにして、これらが最初に生じたときの印象に頼らなくてもわれわれは推論できるのであるが、それはしかし、ここに述べた説に対する正当な反論にはならない。なぜなら、かりにこうした印象が記憶からすっかり消え去ったと仮定しても、印象が生み出した確信はそのまま残りうるのであって、したがって、原因と結果に関する推理がすべてをもとにたどればある印象から引き出されることはやはり真実であるからである。（ヒューム、50 ページ）

・・・「ここに述べた説」とは（大雑把に言えば）「記憶か感覚機能かどちらかのよりどころがなければ、推論の全体が明らかにこしらえもの、基礎のないものとなるであろう」（ヒューム、50 ページ）という見解のことである。

問題は、「かつてすでに得られた結論あるいは原則をもとにして、これらが最初に生じたときの印象に頼らなくてもわれわれは推論できるのである」というところである。ヒュームも因果推論がいちいち「印象」に頼らなくてもできることを認めている。これは具体的経験を振り返ってみてもそうであると確かめられることであろう。

一方、「かつてすでに得られた結論あるいは原則をもとにして」という見解はどうであろうか？ これは、先ほど私が述べたように「過去の経験の恒常的相伴⇒因果推論」の枠組みを前提とした説明である。因果推論をした事実が具体的経験としてまずある。しかし「すでに得られた結論あるいは原則をもとにして」いるのかどうか、そこは事後的な因果関連づけでしかない。ヒュームは因果推論の根拠を因果関係で説明しようとしているのである。因果関係の“原因”を問うてしまっているのだ。

2. 因果推論の「正しさ」の検証

上記②の場合はどうであろうか。これについては因果推論の答えが見えないのであるから、過去のデータを集めそれらを元に因果推論するのである。つまり過去の経験における関係性(恒常的相伴が見られるかもしれないし見られないかもしれない)を見つけ、それらをつなぎ合わせようとしている。

これについても同様に、因果推論しようとした事実が恒常性によってもたらされたわけではなく、より「正しい」(と思われる)因果推論を目指すために恒常性を持つ関係を探しているのである。

しかし、それら過去のデータに基づいた因果推論が本当に「正しい」のかどうかは、その経済政策を実行して実際に社会がどうなるか見極めるまで分からない。

過去のデータによる推論にもかかわらず、将来予測が大きく外れてしまうことも多い。その場合、新しく得られたデータとこれまでのデータ・経験則との関連づけを改めて見直し、新たな因果関係を構築していくだけである(因果的に辻褃合わせがなされる)。

自らの経験の繰り返し、さらには他者の経験(の報告)により、ある因果関係は否定され別の因果関係に取って代わられる。あるいは常に同じような結果となり否定されることのなかった因果関係もある。経験則はこのようにして更新・蓄積されていくのである。

①の事例においても、ある場面においてマッチの炎と熱さとの関連を見いだしたとしても、それが他の人にとって同じなのか、あるいは別のシチュエーションでも同じなのか、様々な事例において同じような関係が見いだせるのか、という問題が生じる。その時はじめて「恒常性」が関与して来るのである。

思い出しうる“過去のすべての経験”において同じような関係が見いだせていたか、あるいはこれから生じうる経験においても同じような関係を見いだしうるのか、因果関係の「客観的正しさ」がまさにヒュームの言う「恒常性」(あるいは「再現性」)なのであ

る。

つまり、ヒュームは推論の「正しさ」がいかにして確かめられるかということと、なぜ推論できるのか（因果推論の”原因”）とを取り違えている、あるいは混同してしまっているのだと言える。

3. 経験論として因果関係・因果推論を説明するとは

既に述べたが、「恒常性」が因果関係（という思考フォーマット）に対する確信を高め、他の事例においても因果関係が適用できるのではないか、と思わせるのだ、という説明が「間違い」であると言っているのではない。そういう可能性もある。しかしこれも因果推論によるストーリー構築なのであって、因果関係とは何か、という問題の説明になっていないのである。

因果推論というならば、人間の脳に因果的思考をする回路が組み込まれていて、いやおうなしにそうになってしまうのだ、という言い方だって可能なのだ（ちゃんとそれを裏付けるデータが得られたのであれば）。

そうではない。経験論として因果関係を説明するということは、因果推論の「原因」を問うことではなく、因果推論というものが具体的経験としてどのように現れているのか、それをやはり具体的に説明することなのである。

したがって、心が一つの対象の観念もしくは印象から、他の対象の観念もしくは信念へと移るときに、心は理性によって規定されるのではなく、想像においてこれらの対象の観念を連合し、結び合わせるようなある原理によって規定されるのである。

われわれにはこうした相伴の理由を見きわめることはできない。ただ事からそのものを観察して恒常的な相伴のために、対象が想像において結び合わされるようになるのをいつも見いだすというだけである。（ヒューム、57 ページ）

・・・「相伴の理由を見きわめることはできない」というのはもっともである。一方で「原理」というものが実際にあるのだろうか？ 因果推論した事実はある。しかしそれが「原理」によってもたらされたものなのか、その「原理」というものが具体的経験として現れていないものなのである。

「恒常的な相伴」が因果推論をもたらす「原理」なのではない。「恒常的な相伴」はあくまで個別的な因果関係の「客観的正しさ」「必然性」を担保するものなのである。恒常的な相伴がなくても因果推論は成立する。そもそも推論そのものに究極的な根拠など必要ないし、それが「正しい」ものである必要もないのだから。経験論としては、推論した事実のみを認めればよいのだ。

IV. 経験がいかに知識をもたらすかではなく、知識がいかに経験として現れているか、そこが問題

「印象の先行」(ヒューム、16 ページ)、「観念が印象の原因なのではないこと」(ヒューム、16 ページ)、というヒュームの見解について、どのようにその真偽を確かめうるのか、具体的に考えてみてほしい。まず私たちが思い浮かべる何等かのイメージ(=観念)がある。ではそのイメージに対応する印象というものを経験した記憶というものを必ず辿れるであろうか？

もちろん、見たことがあるものだ、というふうに辿れるものも多い。しかし、何せ小さいころの経験であろうから印象と観念のどちらが先だったのか覚えていない、そういうものも多いのではないだろうか？

たとえば、黄緑色をイメージすることはできるであろう。しかし私たちが生まれてから最初に黄緑色をイメージした記憶というものを、いちいち覚えているであろうか？そしてその前に黄緑色のものを見たという記憶を辿れるであろうか？ 私たちが出来るのは、黄緑色を今イメージすることと、実際に黄緑色をした物がこの地球上に、あるいは身近に存在しているという事実を確認すること、そしておそらく私はそれらを小さい頃に既に見ているであろう、という推測である。

実際のところ、実際に見ている可能性は高そうであるが・・・私自身に起こった出来事として事実としての印象と観念との関連付けは非常に難しいことなのである。

ただ、私たちはイメージとしての黄緑色と、実物としての(例えば若葉とか色鉛筆とか)黄緑色とを指し示したり(イメージしたり)できる、確実なのはそこまでである。

別に私は印象⇒観念、という因果関係が成立しえないと言っているのではない。ただそれは絶対的真理ではなく、因果関係であるからには、あくまで蓋然性(probability)としての事実関係把握だ、ということなのである。ひょっとして、印象⇒観念、という枠組みに収まらない経験がどこかにあるかもしれない。私たちは赤ん坊のころからのすべての記憶を保持しているわけではないのだ。完全なる恒常的相伴を確かめることは困難、というか不可能であるように思われる。

そして、ここまで本稿を丁寧に読まれた方ならば理解していただけると思うが、経験論の課題として「印象⇒観念」という枠組み、あるいはどちらが先行しているのかという問題はさして重要なことではない。そもそも問い方を間違えているのだ。既に説明したように、ヒュームは因果関係における経験の位置づけを見誤っている。因果関係だけでなく、その他の“哲学的関係”の説明においても同様だ。経験がいかに知識をもたらすかではなく、知識がいかに経験として現れているか、そこが問題なのだ。

そこを見誤っているから、知識や因果関係や同一性や信念やらが経験からもたらされるときに「習慣」やら「知性」やら(あるいは「想像」やら「きずな」やら「引力」やら)というものが“介在”するかのように分析せざるをえなかったのである。